

人狼サバイバル

気炎万丈！ 世界の果ての人狼ゲーム（上）

甘雪こおり／作 himesuz／絵



講談社 青い鳥文庫

もくじ

登場人物紹介

4

序章

8

1 オーシャン・オブ・ファイア

10

2 終末の日

33

3 犬の力

52

4 元始、私は

86

5 ウは嘘つきのウ

113

6 未来からの復讐者

131

7 もしも僕が悪魔でも、友達でいてくれますか？

149

8 終末へのカウントダウン

169

9 人は人に対して狼である

190

10 この血の最後の一滴までも

219

あとがき

248

人狼サバイバル

き えん ばん じょう
気炎万丈！
せ かい は じん ろう
世界の果ての人狼ゲーム(上)

登場人物紹介

参加メンバー

あか むら 赤村ハヤト

おとな 幼なじみの黒宮ウサギとともに、はくしやく 伯爵
かい さい じん ろう
が開催している「人狼ゲーム」に複数
かい さん か つばき おかしやうがく せい と
回参加している。椿が丘中学の生徒。



くろ みや 黒宮ウサギ

おとな ハヤトの幼なじみで、おかしやうがく せい
徒。たいへんな食いしん坊。子どもっ
ぽく見えるが用心深い一面もある。



えん ねつ いん 炎熱院カリユウ

りゅうじん がく せい と
竜陣学園の生徒。竜興マシーナ
リーの跡取り。





はい ばら
灰払ヒョウ

ひょうりょう ばらに かんが
飄々として何を考えているかわから
ない。椿が丘中学の生徒。



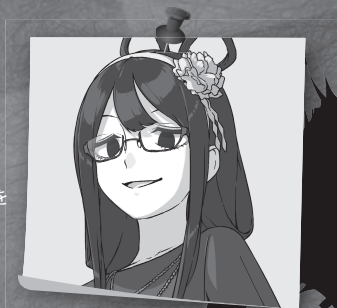
さ みどり
早緑キツネ

ひやと うさぎの とうぎせい。あわてん
坊。椿が丘中学の生徒。



れ もん ざと
檸檬里ムササビ

うん どうしんけい よく、 にんじや
運動神経が良く、忍者のようにすば
やく 動く 女の子。



き きょう じ
桔梗路カイコ

ようこう かんきやうがく せい と かいちやう くらふち めがね
陽光館中学の生徒会長。黒縁眼鏡を
かけた女の子。

さん か
参加メンバー



ぐん じょう
群青マムシ

へび の 形の イヤリング を つけた、小太
り の 男 の 子。月影館中学の生徒。

すみ さか
墨坂ベタ

げつえい かん ちゅうがく せい と は で
月影館中学の生徒。派手なフラメン
コドレスを着ている。明るい性格。



しぶ がき
渋柿タイマイ

そうじょう れい せい いろ
早熟で冷静。色のうすいサングラス
をかけている。汐浜中学の生徒。



御影コウモリ

首に太いチョーカーを巻いている。
砂夜中学の生徒。

氷霜院リュウオウ

竜興ファイナンスの御曹司で、竜陣
学園の生徒。



審判

伯爵

あらゆるゲームの達人。「人狼サバイ
バル」の主催者。



序章 じょしょう

昔々、あるところに小さな村がありました。

村人は平和に暮らしていましたが、ある日、1人が服だけを残して消えてしまいます。

服は大きな爪で引き裂かれ、血がべつとりとついていました。

狼ではありません。狼は人間を丸呑みになんてできないからです。

熊ではありません。大きな熊が出たら誰かが気づくからです。

人ではありません。人には人を引き裂く爪なんてないからです。

それは人狼のしわざでした。

人狼は人に化ける怪物です。大きな爪で人を引き裂き、大きな口で人を食べる、おそろ

しい生き物です。仲間に化けた人狼が、こっそり村人を食べていたのです。

村人たちは広場に集まり、輪になりました。そして仲間になりました人狼を見つけ出

すことにします。

人狼は姿形をまねているだけです。話し合いを続ければ必ずどこかで嘘をつきます。

村人は話し合います。嘘をついているのは誰か。

村人は話し合います。怪しいのは誰か。

村人は話し合います。仲間でないのは誰か。

証拠なんてありません。お互いの顔を見て、声を聞いて、身振り手振りや言葉に注意し

て、怪しいと思う者を選ぶしかありません。村人たちは石を持ち、怪しい仲間に投票しま

す。いちばん多く石を集めた1人は処刑され、その日の話し合いは終わります。

ですが、ずる賢い人狼は生きていました。

夜中にこっそり起き出して、村人の1人をまた食べてしまいます。

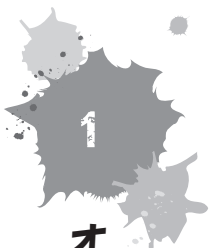
次の日、村人はまた話し合いをすることにしました。

人狼は強い生き物ではありません。2人の村人に囲まれたら、棒でたたかれて負けてし

まいます。でも、1対1なら村人に負けることなくあります。

村人は話し合いを続けます。仲間の中にひそむ、人狼を見つけるために。

人狼は嘘をつき続けます。村人が最後の1人になるまで。



オーシャン・オブ・ファイア

上昇気流に乗った鳥が、翼を動かさず空を横切る。

そのシルエットはどこか無機的で、群れは鋸に似たV字形を構成している。

1羽が何かを落とす。他の数羽がそれに続く。

ぱらぱらと落ちてきたのは糞じやなく焼夷弾で、着弾した瞬間、黒煙の絡んだ炎の塊がいくつも膨れ上がった。

炸裂から数秒遅れて、轟音と震動がおれの元へ届く。

「ヒトの歴史は、火とともに始まった。」

バーテンダー風の服を着た女の子が、飛び去る爆撃機を見上げている。

「火の扱いを知って、ヒトは猿ではなくなつた。」

耳障りなキャタピラ音とともに行進する戦車が、砲撃音を轟かせる。

低い羽音を残しながら飛ぶドローンの一団が、銃弾の雨を降らせる。

そのすべてを見下ろすように、黒々とした火山が連なっている。

「だから。」

女の子——炎熱院カリユウが振り返る。

表情はない。

「だから火の扱いを間違えた時点で、ヒトの歴史は終わる運命にあつたんだよ。」

カリユウの背後に広がる火山は、絶え間なくマグマを噴き出している。

大地の血液を思わせる灼熱の溶岩は鮮烈な色彩の川を作り、輝きを失い、粘つきながら樹状に広がって、冷えて固まり、黒ずんだ岩石へと変化していく。

しゅうしゅうと音を立て、白い煙をたなびかせる溶岩は、まるで生きているかのように脈動している。

それはおれたちのすぐ近くにまで流れこんでいるけど、見た目ほどの熱さを感じない。

むしろ、寒いぐらいだ。

「思ったより少ないね、数。」

カリユウはおれたちを——自分と敵対する位置に立つ全員をなめるように見渡した。



「てつきり全員来ると思つてただけど。伯爵？」

カリユウが視線を動かした。その先には、溶岩が不自然に盛り上がった小山があり、1人の男が立っている。

「それではゲームにならないからね。」

肩まで届くチョコレート色の髪。

年は30歳ほどで、ひげは生えていない。目の片方だけ丸眼鏡をかけている。表情はわからなく、目は子どものようにキラキラしていた。

——「伯爵」。

山奥の館に住んでいて、人々を命がけの人狼ゲームに誘う男。

「ゲームとは、プレイヤーが楽しめるものでなければ。君1人に対して30人以上の参加者が同時に敵となるのは、愉快なゲームとは呼べない。」

「お前もその有様なのに、まだ『ゲーム』にこだわるんだ？」

伯爵の開催する「人狼サバイバル」に参加して、伯爵本人を討った参加者は、どんな願いも叶えてもらえる。

おれはずっと、伯爵にゲームをやめさせることを目標に戦い続けてきた。

中には個人的な願いを叶えようとするヤツもいたし、世の中を良くするために過激な願いを叶えようとするヤツもいたけど、大多数はおれと同じ考えを持っていた。

でも、1つ前のゲームで伯爵を討つたのはカリユウだった。

叶えられた願いは——『全人類を植物に変えること』。

例外はおれ——赤村ハヤトと、願いを叶えたカリユウ自身、それにカリユウの遠縁の親

戚である黄金院リユウヒメだけ。

伯爵も人間だから植物化の対象らしい。顔の一部が植物に変化しつつある。

「信じなければよかった……！ あなたのことなんて。」

おれのすぐそばで、幼なじみの黒宮ウサギがうめく。

その身体には植物の蔓が這いまわっている。

「変だつて、ずつと思つてた。だからあのとき、ちゃんと疑つてれば。」

「変えられるのは未来だけだよ、ウサギちゃん。」

カリユウはさりと受け流した。

その胸元むなもとでは、「火ひ」という漢字かんじのピンバッジが、溶岩ようがんと同じ色いろの鈍い光ひかりを放はなっている。

「罵倒ばとうも後悔こうかいも時間じかんのムダだ。」

「伯爵はくしや。今回の参加者さんかしゃの選定理由せんていりゆうを聞きたい。」

白いスーツ姿すがたの男おとこの子こ、氷霜院ひようそういんリュウオウが押し殺ころした声こえで問う。

——その顔かおの一部いちぶも植物しよくぶつに変化へんかしかけている。

「黄金院こがねいんリュウヒメ……ヒメも、紫電院しでんいんと闇夜院やみよいんも、参加さんかの意思いしを表明ひようめいしていたはずだ。

なぜここにいない？」

「今回は自主的じしゆてきな参加希望者さんかきぼうしゃがとても多いので、その中なかから抽選ちゆうせんしているよ、氷霜院ひようそういんリュウオウくん。」

（！）じゃあ、おれとウサギも、参加さんかを希望きぼうしたからじゃなくて、その後抽選あとしちゆうせんされてここに……。）

そうか、とつぶやいたリュウオウの顔かおには苦渋くじゆがにじんでいた。

眉間みけんには、そのまま傷きずとして残のこってしまいそうなほど深い皺しわが寄よっている。

「炎熱院えんねついん……。」

「もう話すことはないよ、キング。たとえばお前が今ここで、この世の真理を語りつくしたとしても、『それ』は止められないし、止まらない。」

リュウオウはきつく目を閉じ、「すまない。」とつぶやいた。

ただ、再び開いたその目の先にいたのは、カリユウじやなかった。

「御影。君の危惧したとおりになつてしまった。すまない。」

言葉を向けられた御影コウモリは、迷惑とも困惑ともとれる表情を浮かべる。

「……。いや、おれはこんなことになるとは思つてなかったし、言つてもないし……。そも

そもこの状況は別にお前のせいじゃない……。んだよね、ウサギ？」

「うん。……。今、こうなつてる理由は。」

炎熱院カリユウは竜興マシーナリーという大企業の令嬢だ。

会社の主力事業は、かつてはただの産業機械で、今は軍用ドローンを含む兵器の開発。

方針転換のきっかけはカリユウの母親を含めた大勢が、途上国支援の最中に武装勢力の

手で命を奪われたから。

そしてつい最近、今度はカリユウの父親が襲われた。

相手は武装勢力じゃなく、平和を望む市民団体。説明責任を果たすための対話の最中、

そこに紛れこんだイレギュラーな人間によって、カリユウの父親は昏睡状態に陥った。

そのとき、たぶん、カリユウの中で何かが切れた。

「だから全人類をこうするって？」

植物化しつつある腕を持ち上げたコウモリは、しばらく間を置いて、言った。

「……そんなことしても、戻るものなんて何もない。それに。」

コウモリは一瞬空を見上げて、またカリユウを見る。

「それで何かを成し遂げて、あなたはきつとどこにも行けないよ。」

「行きたい未来なんて、もうない。」

カリユウはコウモリと視線を絡ませた。

「何かに戻ってきてほしいとも思っていない。私は終わらせたいだけ。」

「無関係の人たちを巻きこんで？」

「巻きこまれた側だよ、私は。」

「何に？」

『愛』と『平和』。

爆撃がまた始まった。地は焼かれ、轟音とともに揺れる。

「愛と平和のために、自分たちと意見の違う者をつぶせ。愛と平和はすべてを受け入れるけど、あいつらは例外だから拒め。あいつらは愛と平和を阻むから、消し去れ。」

カリユウの背後で爆炎が膨れ上がる。

「私は……私たちは愛と平和のために、誰かを救い、護るために戦って、戦って、戦って……それで、『愛と平和の敵』にされた。」

新たなマグマが噴き上がり、冷え切った溶岩を赤く濡らしていく。

「支配も、侵略も、差別も、同化も、『愛と平和』から生まれた。そんなの今を生きる私たちにとっては常識だ。なのに人間は……歴史から何も学んじやいない。」

「ま、いいじゃないか。そういう小難しい話は。」

表情を強張らせるコウモリの肩をたたいたのは、桔梗路カイコだった。

「カリユウを責めたところでどうにもならないし、説得しても願いは帳消しにならない。

今はまず、この『人狼サバイバル』に勝つことだ。」

「そういうわけにもいかないだろ。」

渋柿しぶがきタイマイがサングラスの角度かくどを整ととのえた。

「今あんたが言ったことの逆さかの話だ、桔梗路ききやうじ。このゲームに勝かつてすべてを元もとどおりにできても、そいつの考えかんがは変かえられない。だったらオレたちはこれから先さきもずっと、そいつが願ねがいを叶かなえる恐怖きようふに怯おびえ続けることになる。」

タイマイは鋭すどい目めをカリユウに向むける。

「起きたことは気きの毒どくだけど、単たんなる護衛ごゑいの判断はんだんミスだ。他人たにんの思想しそうに罪つみはない。」

タイマイの声音こゐねは表情ひようじようと同おなじぐらい淡泊たんぱくだった。

「傷心しやうしんの腹はらいせにしては度どが過すぎてる。お前まえが怒いかりに向むけるべきは特定個人とくていこじんであつて、全ぜん人類じんるいじゃないだろ。」

「怒いかりは向むけてないよ。私わたしが届とどけるのは愛あいと平和へいわのプレゼントだ。」

「その愛あいと平和へいわのプレゼントを無関係むかんけいの人間にんげんに届とどけるのは、お前まえがやられた理不りふ尽じんと大したいて変かわらないだろ。同おなじレベルに墜おちたいのか。」

「同おなじレベルに墜おちる？ おかしなこ言うね。私わたしは心こゝろを入れ替かえた。武器ぶきを作るなんて

よくないよ。人類はみんな兄弟なんだから、手を取り合い、花束を贈り合い、笑い合うのがいちばん正しい。」

無言のままのタイマイの顔が陰しくなっていく。

「私はラブ・アンド・ピースの精神に目覚めた。だからこの世から差別をなくして、醜い争いも憎悪も、残酷な暴力も戦争も消してあげる。反対する理由なんてないんじゃない？」

「それを善意だつて言い切るつもりか。」

「言い切るよ。だからお前に指し手はないんだ、お利口さん。」

タイマイはむつつりした顔で黙りこむ。

「……それはお前が浴びてきた、いわれのない非難を肯定することになる。」

檸檬里ムササビが静かに告げた。

「お前と父親がやってきたことは賛否両論あつたかもしれないけど、悪行なんかじゃなかったはず。でもお前がこんな形で報いたら、今まで父親たちが積み上げてきたことも、お前自身が堪えてきたことも、全部塗りつぶされてしまう。……『お前たちは邪悪だつ

た』。それが事実じじつになつて、真実しんじつになる。」

「そうだね。そのとおりだ。」

でもさ、とカリユウは眉まゆを動かす。

「2度目どめなんだよ。親おやの命いのちを奪うばわれるのも、それを笑わらわれて、喜よろこばれて、拍手喝采はくしゅかつさいするやつらを見るのも。」

「！」

「お前まえの言いつてゐることは正しい。でも、両親りやうしんの命いのちと魂たましいへの侮辱ぶじよくすら慎つつましく受け止とめて、世間様せけんさまの顔色かおいろを窺うかがうことが『正したださ』なら、私わたしはその『正したださ』のほうを否定ひていする。」

ムササビが唇くちびるをきつく結むすんだ。

「ずいぶん待つてやったけど、謝罪しやざいも自浄じじようもなかったよ。先に邪惡じゃあくさを証明しやうめいしたのはあつちであり、そつちだ。お互たがい邪惡じゃあく同士どうしなら、より強い邪惡じゃあくが意志いしを通とおすだけ。」

「……同情どうじやうはする。けど、それはそれ。」

ムササビは輕かるく腕うでを回まわした。

「悲しみは暴力ぼうりよくの免許証めんきょしょうじゃない。自分じぶんはお前まえを否定ひていする。」

「あたしもお断り。草になんてなりたくないもん。」

早縁キツネが不満そうに唇をとがらせると、カリユウは目を細めた。

「人間は考える葦っていうじゃん？」

「違うよ。あたしは『ヒト』っていう獣。」

キツネは即答し、続ける。

「草じゃないよ。」

そつか、とだけ返し、カリユウはそれ以上何も言わなかった。

「ヒヨウくんヒヨウくん、GO。」

キツネにわき腹をつつかれた灰払ヒヨウは、億劫そうにうめいた。

「あー……ま、『信じなければよかった』わけじゃねーよな、とは思ってる。けど。」

ヒヨウがいつもつけているヘッドフォンにも蔓が巻きついてる。

そして普段から前髪で見えづらい目元が、今日はいつそう見えづらい。

「けど、こうなっただったら止めないとな。……。」

ヒヨウは目元を見せないまま、口元の表情を消す。

「そつちの2人は見物人かね？」

カイコに水を向けられたのは、小太りの男の子とフラメンコドレスを着た子だ。

「墨坂墨坂。なんか言えつてよ。」

「え。ベタちゃん別に言うことないよ。」

端のほうで身を寄せ合っていた群青マムシと墨坂ベタは、わざとらしく声をひそめる。

「だって、人を好きになるのはいいけど、嫌いになるのはダメって変だし？ 燃えるほど

愛していいなら、燃えるほど憎むのも自由だよね。」

「ふぎけるな。人類全体が巻きこまれてるんだぞ……！」

「じゃあ何人までなら巻きこんでいいの？ 誰かを愛したら、少なくとも1人を巻きこん

で、人生を変えちゃうよね。10人ならオッケーで、100人からはアウト？」

「屁理屈だ。」

「そだよー。」

ベタはタイマイをあしらいい、あつけらかんとした調子で続ける。

「それに、案外植物になったほうがマシって人もいるんじゃない？」

病気のひととか、毎日

苦しくて辛い人とか。だからベタちゃんはノーコメンツ!」

「なのに来たのか。」

「ノーコメンツだけど、ノーサンキューだから。ママちゃんは?」

「オレ? まゝ、気持ちわかるからなあ。」

ママシの耳で、蛇形のイヤリングが揺れる。

「なあ。……治して、癒やすんじやダメだったのか、親父さん。」

「同じことが起きるだけだよ。」

「かもな。でも、今のあんたなら防げるだろ。」

「かもね。でも最高の医療機関で、あらゆる外科的な治療を施しても目覚めない父さんを伯爵の力で無理やり快復させるのは、死者蘇生と同じだ。」

一瞬、ひやりとした空気が流れた。

「そんなことしたら、よみがえった父さんの命は父さんのものじゃなくなる。それはもう、私の所有物としての命、ペットみたいな人生だ。たとえ本人がその事実を知らなくても、私が顔を合わせられない。」

「ま、そうだな。それに、それは命の選別だよな。」

ママシはうつすら笑みを浮かべたまま、あごをなでた。

「おたくはひどい目に遭つてきた。伯爵に頼んで親の命を取り戻すって言つても、誰も反対しないし、できねえだろうよ。でもそれをやつちまったら、もつとひどい目に遭つた連中の、もつとむごい終わり方をした命に罪悪感を覚えちまうよな、おたく自身が。」

話すうちに、ママシの笑みに寂しさが混じる。

「人が命を亡くすことに『不慮』とか、『悲惨』とかつけるヤツいるけどよ、命の終わりになんて大なり小なり悲惨だし、不本意だし、無念だもんな。亡くなつちまつた命のうち、これはよみがえらせるべきで、これはそうじゃねえとか、いったい誰が決めるんだって話になる。」

「そうだね。私もうちよつと鈍かったら、いろいろ丸く収まつてたかもね。」

「本当にな。もつと素朴に、犬猫みてえに生きられたらな。」

ふー、と。ママシは長い息を吐く。

「苦悩だけがまともさの証だ。厭になるよな。」

まあでも、とマムシは頭をかいた。

「『これ』は止めさせてもらうわ。幼なじみに、膝枕してやれなくなつちまうからな。」

そこで会話が途切れた。

ごうごうと、雨をはらんだ強風のような、打ち寄せる大波のような音が遠い火山から聞こえてくる。

「……物わकारいのいいのが多いね。」

カリユウは目を細めた。

「それは自分と意見の違う他人を理解して、尊重して、共生すべきだから？」
爆撃音が止み、不気味な沈黙が降りていた。

「でも、それってお前たちの本音じゃないでしょ。命の危機なんだから、感情的に反発するのが生物として自然だ。なのに、なんで私を理解しようとする？　なんで私の意見を尊重しようとするの？」

どこかで炎が揺れた。

「答えは簡単。お前たちは、誰からも絶対に批判されない『正しさ』に、逃げこみたいか

らだ。」

「……！」

「『私は炎熱院カリユウに理解を示した。理解を試みた。だから、これから何が起きようとも私は悪くない。悪いのは理解を拒んだ炎熱院カリユウのほうだ』。……そういうことでしょ？ それは理解でも歩み寄りでもない。単なる言い訳だよ。」

カリユウが黒土を踏み、こちらへ向けて歩き出す。

「愛と平和。理解と共生。自由と希望。調和と秩序。どれもこれも、絶対に批判できない最強の盾だ。現実に起きている問題に対して、具体的に実理的な論理と筋道を組み立てれば、必ず反対意見が現れて論争になる。でも、清らかで、わかりやすく、シンプルな理想には絶対に反対者が現れない。だから『そっち側』に……盾の後ろに立つてさえしまえば、自分は正しくて、意見の違う者は悪人だと、胸を張って言える。」

カリユウの目が、コウモリを、ムササビを、マムシをとらえる。

「お前たちが『正しい』を愛するのは、それが『正しい』からじゃない。『強い』からだ。自分がかすり傷一つ負わずに、意見の違う人間をたたきつぶせるからだよ。」

カリユウの目に火がともった——ように見えた。

「『私は悪くない』と言いたいだけのくせに、お前たちは美辞麗句を掲げて、思つてもいない言葉をほざく。そして向き合うべき現実から目をそらして、解決を拒み、仲間同士で共感し合つて、敵をたたいて気持ちよくなつて、それで終わり。現実は何一つ変わらず、先送りにされた争いの火種が炎に変わつても、お前たちは『悪くない』。なぜなら、『正しい』ことを言つたから。『正しい』側の聖域に立つたから。」

足を止めたカリユウの髪を、強い風が巻き上げる。

まるでカリユウ自身の怒気が、風と化して立ち上つたかのように。

「お前たちは。」

息を吸つたカリユウの周囲を、火の粉が舞う。

「お前たちは、何一つ真剣に考えちゃいない。愛のことも、平和のことも、戦争のこと

も、人間のことも！」

カリユウの瞳に宿る火が、炎と化した。

「対話を拒み、人の命を奪うから武器は野蛮？」

違うね。本当に野蛮なのは……本当に対

話と解決を拒んでゐるのはお前たちだ。お前たちは『正しき』を信じてゐるだけで、『人間』のことなんてまるで信じてない。まともに見てすらいらない。人の持つてる色も光も陰影もいつしよくたにして、敵か味方かしか感じとれず、考えられない……!」

ああ、と傷が熱でも持ったみたいに、カリユウがうめき、顔を伏せる。

「お前たちみたいなヤツがいるから、いつまで経つても戦いが終わらないんだ……!」
再び顔を上げたとき、カリユウの顔には怒りがあつた。

「お前たちみたいなヤツがいるからッ……!!」

火山が、ひときわ大量のマグマを噴いた。

それは上空何千メートル、何万メートルにも及ぶ黒煙を噴き、青空と、日の光を覆い隠していく。

「……誤解があるようだな。」

カイコがゆつたりとした口調でつぶやいた。

「物わかりがいいと言つていたが、今ここにいる参加者は全員が自分の意思でこの場に来ている。そして誰一人、棄権の意思など表明していない。」

どろりと濁ったように見えるカイコの瞳を、炎が照らしている。

「我々が自分の考えを述べたのは、それが正しいからじゃない。それが我々の意見だからだ。そしてお前と正しさを競うつもりもない。」

「……要するに？」

「こちらの覚悟は完了している、ということだ。始めようじゃないか、正しい者ではなく、生き残る者を決める『人狼サバイバル』を。」

ああ、とカリユウは満足そうに目を細める。

「話が早いね。」

「カリユウさん!!」

おれ——赤村ハヤトが前に出ると、カリユウの視線が動いた。
ほんの少しだけ、世界の火勢が和らぐ。

「お前は来ると思ってたよ、ハヤト。……。」

カリユウは自分の部屋を見せるように、背後の世界を手で示した。

「はじめまして。これが私。」

新たなマグマが絶え間なく噴き出し、溶岩が流れ続け、戦闘機が飛び交い、戦車が走り、ドローンが飛ぶ。

銃撃、砲撃、爆撃が繰り返され、地は揺れ、空気が震える。

まるでこの世の地獄。

「……っ！」

おれは何度も人狼サバイバルに参加してきた。その中で、カリユウの漂わせる危険な雰囲気（ふんいき）に誰よりも長く接していた。

なのに、気づいてあげること、歩み寄ってあげることできなかった。

この場所（ばしょ）がカリユウの見てきた世界（せかい）というわけでも、カリユウの内面（ないめん）を映し出した鏡（かがみ）だとも思わない。

ただ、全人類（ぜんじんるい）を滅亡（めつぼう）させかけているという事実（じじつ）は動（うご）かない。

その場の勢（いきお）いじゃなく、覚悟（かくご）のうえでやったということも。

謝罪（しやざい）の言葉（ことば）。嘆（なげ）きの言葉（ことば）。癒（い）やしの言葉（ことば）。

喉（のど）から出（で）そうになるいろいろな言葉（ことば）を押（お）しとどめて、おれは絞り出（だ）す。

「止めます。あなたは、おれが……!!」

カリユウは珍しい虫でも見るような目で、おれを見つめた。

「……やつぱり、ハヤトはおもしろいねえ。」

「では、ルールを配布するよ。」

あらゆる音が遠ざかり、伯爵の声が聞こえた。

ばらばらと、封筒が落ちてくる。

2

終末の日

【全体ルール】

- ・これは参加者の中に隠れている「3人の狼」を当てるゲームである。
- ・参加者とは、「赤村ハヤト」「黒宮ウサギ」「灰払ヒヨウ」「早緑キツネ」「檸檬里ムササビ」「桔梗路カイコ」「群青マムシ」「墨坂ベタ」「渋柿タイマイ」「御影コウモリ」「氷霜院リユウオウ」「炎熱院カリユウ」の12名を指す。
- ・参加者は役職を割り当てられる。村人陣営は9名の「村人」であり、狼陣営は2名の「火妖精」、1名の「炎魔」である。なお、「赤村ハヤト」は「村人」である。
- ・狼陣営の参加者は悪魔に憑依され、勝利を目的に行動する。自陣営を不利にする言動をとることはできない。
- ・参加者の役職はゲーム初日に知らされる。役職は変更できない。

・ゲームは「昼時間」「議論時間」「投票時間」「夜時間」の繰り返しで構成される。初日は「昼時間」から開始される。

【投票のルール】

- ・議論及び投票は「炎界ムスperlヘイム」で行う。
- ・参加者は「投票時間」に投票を行う。最多得票者は「退場」となり、以降のゲームに参加することはできない。
- ・参加者は自分に投票することができる。ただし、すでに退場した参加者や参加者以外の者に投票することはできない。
- ・最多得票者が2名いる場合、該当する参加者は全員退場する。該当者が3名以上の場合、2名以下になるまで決選投票を繰り返し返す。
- ・参加者の選択及び投票には「五行剣」を使用する。集計と最多得票者の発表は伯爵が行う。
- ・どの参加者がどの参加者に投票したのか、公開されることはない。
- ・投票によって退場が決まった場合、その参加者の役職や陣営は開示されない。

【勝敗のルール】

・ 村人陣営は、狼陣営全員を「退場」させた場合、勝利となる。

・ 村人陣営が勝利した場合、参加者全員が解放される。また、「炎熱院カリユウ」の願いは無効となる。

・ 狼陣営は、村人陣営の生存者数が狼陣営の生存者数と同じか、それより少なくなった場合に勝利となる。

・ 狼陣営が勝利した場合、参加者の「植物业」が最終段階まで進行する。

【狼陣営のルール】

・ 「夜時間」に、狼陣営は退場していない村人陣営の参加者のうち1人を選ぶ。狼陣営はその参加者を襲撃し、「退場」させる。

※参加者の選択方法は指さし、五行剣、口頭での意思表示のいずれかとする。

・ 狼陣営が2人以上の場合も襲撃によって退場する参加者は毎夜1人である。

・狼陣営は役職が決定した時点で、自分以外の狼陣営が誰なのかを知らされる。

・「火妖精」は自身の所属陣営が確定していない場合、ゲーム中、任意のタイミングで「CO」を行うことができる。

・「CO」した場合、自分の役職が全体に公開され、生存日数と同数の「万猪肉」を獲得する。

※生存日数は「昼時間」開始時に1ずつ増える。これにはゲーム開始直後の「昼時間」開始時も含まれる。

【炎魔のルール】

・狼陣営のうち1名は「炎熱院カリユウ」であり、「炎魔」の役職を割り当てられる。

・悪魔は炎魔への憑依を拒む。

・炎魔はあらゆる能力の対象とならず、投票を行うことができず、投票・禁止事項違反以外の理由で退場しない。

・炎魔は自分以外の狼陣営が生存している限り、投票の対象とならない。

- ・炎魔は自身に1票でも票が投じられた場合、投票結果の開示を待たず、ただちに退場する。
- ・炎魔は「赤村ハヤト」を直接退場させる行動をとることができない。
- ・炎魔は「神器」を使用できる。

《神器…炎災杖剣レーヴァテイン》

- ・炎魔は夜時間開始時に『神器レーヴァテイン』の使用を希望することができる。
- ・レーヴァテインを使用する場合、狼陣営の「襲撃」は行われない。
- ・レーヴァテインを使用する場合、炎魔は四肢・五感などの重要な身体機能のうち1つを選び、喪う。
- ・レーヴァテインは参加者1名を退場させ、未召喚の神2柱を焼きつくし、未召喚の狼1匹を焼きはらい、ゲーム外の「人狼サバイバル」経験者1名をこの世から退場させる。
- ※参加者及び神及び狼は炎魔が選択する。選択しない場合、ランダムに決定される。
- ・レーヴァテインは神3柱以上の「守護」が重なった状態でなければ防ぐことはできない。
- ※防ぐことができるのは参加者の退場のみであり、それ以外の処理は退場の成否に関わらず、

レーヴァテインを使用する場合は必ず発生する。

・喪われた身体機能はゲーム中の負傷とみなされず、ゲーム終了時に治療されない。

《禁止事項》

・参加者は参加者に対して暴力を行使してはならない。

・参加者はゲームが終わるまで「炎界ムスperlヘイム」を離れてはならない。

・参加者は「五行剣」「万猪肉」を壊すなどの行為で、ゲームの進行を妨げてはならない。

・参加者は他の参加者の「五行剣」「万猪肉」を奪ってはならない。

・参加者は「自陣」を出てはならない。

・参加者は昼ゲーム中、必ず勝負を行わなければならない、使用可能な「五行剣」を選択しなけ

ればならない。

・参加者は伯爵の指示から5分以内に投票を行わなければならない。

・参加者の投票は1日につき、1人1票とする。投票後の取り消しはできない。

・参加者は投票を毎日必ず行わなければならない。

- ・狼陣営以外の参加者は襲撃が行われる場合、夜時間の間、目を閉じていなければならない。
 - ・参加者は他の参加者が禁止事項に違反するよう企図してはならない。
- ※いずれかの禁止事項を破った参加者は強制的に「退場」となる。

途中までルールを読んだところで、おれは手を止めた。

本来、伯爵のゲームは「人狼」だ。すべての参加者は村人陣営と狼陣営とに分かれ、村人陣営が狼陣営を探し出すことが基本になっている。

でも今回は違う。

狼陣営の中に1つだけ、参加者と紐づき、名前まで公開されている役職がある。

『炎魔』……。

それが炎熱院カリユウの役職。

狼陣営固定で、今回のゲームの最終目標。

カリユウを——炎魔を退場させれば、人類の植物化は止まる。

けど、もし負けたら——

【昼時間のルール…終末の日】

- ・各参加者はゲーム開始時に「五行剣」を5本渡される。
- ・渡される「五行剣」の内訳は「木」「火」「土」「金」「水」の5種類で、各1本である。
- ・参加者は、伯爵の合図でいずれかの「五行剣」を選び、地面に突き刺すことで「手」とする。
- ・参加者は「親」と「子」に分かれる。「親」は「炎熱院カリユウ」であり、「子」はそれ以外の参加者である。
- ・「親」は「子」と、「子」は「親」と、選んだ「手」で勝負を行う。
- ・先に「手」を選択するのは「子」である。その後、「親」が「手」を選択し、勝敗が判定される。
- ・「手」の選択から勝敗の確定までを1セットとし、これを3セット行う。
- ・1度使用した「五行剣」は、その日の昼時間中、使用不能となる。

《五行の相剋關係》

- ・「木」は「土」の養分を吸いとり、勝つ。
- ・「金」は「木」を切り裂き、勝つ。
- ・「火」は「金」を溶かし、勝つ。
- ・「水」は「火」を消し去り、勝つ。
- ・「土」は「水」を汚し、勝つ。

【万猪肉】

- ・「子」に勝利した「親」及び「親」に勝利した「子」は、「万猪肉」を1つ手に入れる。
- ・「万猪肉」を5個使用することで、参加者は「召喚」を行うことができる。
- ・「召喚」は「昼時間」または「議論時間」の任意のタイミングで行うことができる。使用する際は口頭で意思表示しなければならない。
- ・「炎魔」以外の参加者は「神」を召喚する。
- ・「炎魔」及びC Oずみの「火妖精」は「狼」を召喚する。

・複数の神または狼が召喚された場合、召喚された順番に処理が行われる。

※一部の神または狼のみ、先に召喚された神または狼より優先的に処理される場合がある。

・1度召喚された神及び狼は、そのゲーム中、再び召喚されることはない。

※俊敏神は例外とする。

【召喚できる神々】

・主神 … 全参加者の全役職を知らされる。

・雷神 … この神を召喚できるのは「村人」のみである。あらゆる条件を無視して、即座に

ムスベルひとり
火妖精1人を退場させる。

・豊穰神…すべての参加者は、次の勝利で手にする「万猪肉」の数が「3」となる。また、参

加者3名を選ぶ。その3名に「守護」を付与する。

・軍神 … 召喚者が生存している限り、「神狼」の召喚及び召喚された「神狼」の効果を封じ
る。また、参加者4名を選ぶ。その4名に「守護」を付与する。

・法律神…「召喚」される狼のうち3匹を選ぶ。当日のみ、その3匹の「召喚」を封印する。

また、参加者3名を選ぶ。その3名に「守護」を付与する。

- ・恋愛神…自分以外の参加者2名を選ぶ。その2名はこのゲーム中、COできなくなり、次の「投票時間」の投票が無効となる。また、参加者3名を選ぶ。その3名に「守護」を付与する。

※同時にCOした場合、恋愛神が優先され、そのCOは無効となる。

- ・弓神…自分以外の参加者1名を選ぶ。その1名はただちに退場する。ただし、自分も次の「議論時間」終了時に退場となる。また、召喚者が退場するまでの間、追加で2個の「万猪肉」を消費するごとに、さらに1名ずつを選ぶことができる。

- ・角笛神…自分以外の参加者1名を選ぶ。その1名と自分を占い、所属する陣営を見やぶる。結果は全参加者に共有される。

- ・俊敏神…全退場者の所属陣営が、全参加者に共有される。2度目以降の召喚には、「万猪肉」を必要としない。また、参加者3名を選ぶ。その3名に「守護」を付与する。

- ・医神…ゲーム開始から数えて4度目の昼時間終了後に召喚できる。退場している村人を全員復活させ、生存している狼陣営のうち1名を退場させる。

※生存しているのが炎魔の場合、誰も退場しない。

※復活した参加者は、退場していた間の記憶を持たない。

・慈母神…退場者と同数まで参加者を選ぶことができる。選ばれた参加者を占い、その陣営を知らされる。結果は全参加者に共有される。また、全参加者に「守護」を付与する。

・世界蛇…この神を召喚できるのは炎魔またはC O ずみの火妖精のみである。4柱以上の神が召喚された後で召喚できる。神1柱と「召喚できる狼」1匹を選び、猛毒で葬る。

・狡猾神…この神を召喚できるのは炎魔またはC O ずみの火妖精のみである。神を1柱選ぶ。次にその神を召喚した参加者は退場となる。このとき、召喚された神の能力は発動しない。

※神々を召喚した参加者が退場した場合、その効果は失われる。ただし、豊穰神を召喚した参加者が退場しても、次の勝利で獲得する「万猪肉」の数は「3」のままである。また、恋愛神、狡猾神を召喚した参加者が退場しても、その効果は残る。

【守護について】

・「守護」を受けた参加者は、狼陣営の襲撃、神狼の道連れ、太陽狼の攻撃、雷神・弓神・医神・狡猾神の攻撃から護られる。

・「守護」はその日のみ有効であり、昼時間開始のたびにリセットされる。

・「守護」を受けた状態で何らかの攻撃を防いでも、「守護」は解除されない。

「召喚できる神の存否は。」

伯爵の声がおれの思考に割りこむ。

「あちらの像で確認できるよ。」

おれたちの立つ場所の、左手側のはるか遠くに、人間の10倍近くはありそうな石像がいくつも並んでいる。

それぞれが槍や槌、弓や動物の角を手にしていて、威圧感を放っている。

「伯爵。『こつち』の像は？」

「そちらは反対側に。」

カリユウの言う、「こつち」の意味は、ルールの続きに書かれていた。

【コールできる狼】

・**獄狼** ガルム …参加者1名を選ぶ。このゲーム中、その参加者の所持するすべての「五行剣」の動

きは、常に狼陣営全員に周知される。

・**双頭狼**…この狼は「夜時間」にしか召喚できない。5匹以上の狼が召喚された後で召喚で

きる。その日の「夜時間」に、狼陣営は襲撃を1回行い、「レーヴァテイン」を1回使用で

きる。

※どちらかを2度行うことはできない。

・**神狼** フエンリル …狼陣営1名を選ぶ。その参加者が退場する際、ランダムな3名の村人陣営を道連

れにして退場させる。

・**太陽狼**…次に「炎魔」との勝負に敗れた参加者から1名を選び、退場させる。

・**満月狼**…参加者2名を選ぶ。その参加者はこの日のみ、狼陣営として扱われる。

※悪魔には憑依されず、火妖精の特性も付与されない。また、ゲームエンドの判定に関わる

「狼陣営の人数」としてカウントされることもない。

・煙狼^{シヤウレン}…その日のみ、すべての参加者の勝負の結果、万猪肉^{マンシュウニク}の獲得状況が非公開状態となる。

・白老狼^{カシガカカ}…神の召喚に割りこむ形で召喚する。その神が対象を選択する場合、その相手はカシガカカ^{カシガカカ}の召喚者が選択する。

・哲人狼^{ライカスローフ}…神2柱を選ぶ。その神々の「召喚」を当日のみ封じる。

・美食狼^{フレキ}…参加者1名を選ぶ。その参加者の持つ「万猪肉」をすべて食い、消滅させる。この召喚と神の召喚が同時だった場合、美食狼の効果が優先される。

・平和狼^{ゲリ}…参加者1名を選ぶ。その参加者は「万猪肉」を5個獲得する代わりに、このゲーム中、投票が無効になる。

・暴君狼^{マナーガルドム}…「レーヴァテイン」による退場者が3名以上いる場合、召喚できる。あらゆるゲーム内時間をスキップして、ただちに夜時間となる。

・怪智狼^{ルー・ガル}…召喚者の持つ「五行剣」は5本失われる。未召喚の神のうち1柱を選び、同じ効果を発動する。

おれたちから見て右手側の奥に、「そいつら」の像はあった。

神々に向かい合うのは、姿かたちもさまざまな「狼」の軍勢だ。

「そちらも神と同様、召喚可能か否かが視覚的にわかるよう取り計らうよ。何か質問はあるかな？」

誰もが黙りこんでいた。

昼ゲームのルールは単純だけど、神々と狼の種類が多く、把握するだけで精一杯だった。

だからだ。それはカリユウも同じよう、ルールに目を落としたままだ。

(このルールって……)

1つのアイデアが閃いた。けどそれは、勝敗を決定づけるにはあまりにも無謀な考えだった。すぐ頭の隅へ追いやった。

ややあって、カイコが口を開く。

「つまり、昼のゲームは『じゃんけん』だ。五択のな。」

「うん。手は5種類。どれか1つを選んだら、どれか1つの手に勝って、どれか1つの手に負ける。それ以外は全部『あいこ』扱いってことだね。」

「あたしたち全員でカリユウちゃんとじゃんけんをして、勝てば万猪肉が手に入って、神を召喚できる……んだよね。」

「逆もまた然りだ。炎熱院が勝てば、勝った数だけ『万猪肉』を渡すことになる。」

「そうになると、狼が召喚されてこっちが不利になる、って感じだなー。」

「『子』が『親』に勝つても、狼が2人紛れている。その対処も必要。」

「くっふふ。ママちゃんママちゃん。ベタちゃんの考えてること、言っている？」

「いいぞ。オレと同じだろ。」

「せーの、と2人は息を合わせた。」

「超ヤバイ。」

「超ヤバイ。」

「……どうヤバイのか説明してよ、2人とも。」

「見りやわかるだろ。」

「諸君、役職を確認してほしい。」

封筒の中には役職を示すカードが入っていた。

おれはルールの時点じてんで、名指なざしで役職やくしやくが指定ししていされている。

出てきたカードは指定ししていどおり、「村人むらびと」。

「確認かくにんいただけたようなので、カードを処分しよぶんするよ。以降いこう、『火妖精ムスベル』は任意にんいのタイミ
ングでCOできるので、そのつもりで。」

じゅわつとカードが灰はいに変わかった。

(！)

途端とたん、劇的げきてきで重厚じゅうこうなオーケストラの一撃いちげきが、あたりの空気くうきを一変いつぺんさせた。

普段ふだんの「人狼サバイバル」では投票時間とうひょうじかんを知らせるために奏かなでられる音楽おんがくが、もう舞臺ぶたいに響ひびいている。

「これは……確か……。」

リュウオウがうめいたけど、その口から曲名きょくめいは出でてこなかった。

おれは知しっていた。

独奏どくそうするピアノに、フルートやオーボエ、クラリネットやホルン、トランペットの演奏えんそうが連なるこの曲の名前なまえは――

(ロベルト・シューマンの『ピアノ協奏曲 イ短調 作品54』……。)

今流れている第1楽章は、激しさと美しさの中に、どこか哀しさを帯びている。

もしかするとゲーム中ずっと流れ続けるのかもしれない。

「命を賭けるスリル、存分に楽しんでほしい。」

「じゃ、始めようか。」

ピアノの和音を浴びながら、カリユウが指揮者みたいに両手を広げる。

「私たちの、『終末の日』。」

参加者の足元に向けて、天から5本の剣が降り注ぐ。